

ないものに没頭する夢想家

— 水木しげるの「楽園への郷愁」 —

マ
テ
ィ
ア
ス
・
フ
ァ
イ
フ
ァ
ー

【翻訳】

ないものに没頭する夢想家

― 水木しげるの「楽園への郷愁」 ―

【要約】

自分とは別である他者と思いがけなく直面することで日常が混乱させられることがある。劇画作家水木しげるの作品は、そういう根本思想でまとめられそうである。この他者が、いたずら好きな家の精コーボルトであれ霊であれ、あるいは風変わりな人の姿であれ、現われると、この出現によって慣れたものの日常のものが絶えず問題にされる。

少なからざる作家の場合に、この主題は深くその人自身の伝記に根ざしている。例えばカフカの「変身」を取り上げると、カフカの他者存在は、彼にとってはグレゴール・ザムザであるが、虫けらの姿で現われる。これはザムザ家の日常を実に手痛く混乱させ、一家の平安はこの異物を取り除くことによってしか回復できない。他者の存在を受け容れないことは、その異なるものにたいする暴力に終わる

マティアス・ファイファー

のが稀ではない。それどころか、しばしば、その異なるものを根絶してしまうこともある。

水木も、言葉と行動による差別を、社会の一員になっていくうちにあわや死のまじかになるほど辛く体験しなければならなかった。そしてこの差別は、彼の創作活動全体が基礎としている原体験と呼ばれうる。一九五〇年代終わりからの初期作品でもう、さまざまな人物やモチーフが優勢である。それらを基にして、社会でのけ者のされた人というテーマがグロテスクで抽象的なレベルで徹底して検討されている。

その一例はゲゲゲの鬼太郎である。水木が大成功を収めた漫画主人公である。これはその作者の特徴と体の指標を付けている。この命名は作者の幼年時代を、その少年が障害を持っていることは、水木が戦争で外傷を負ったことを

指示している。

ようやく一九六九年から、水木が自分の人生の弁明をする自伝作品が始まる。この時期はおそらく偶然ではない。水木が劇画作家として認められることがこの時期に当たるからである。日本が世界で第二位の経済国家として地位を確立したときである。第二次大戦後四半世紀して、日本でも人々は社会のこれまで歩んだ道を、そして未来を考え始める。国が繁栄するための経済成長優先は、あの時期の環境汚染問題や市民運動の抗議が示したように、必ずしも個人の生活レベルの向上とはならなかった。

社会や政治での改革は避けられなかった。ほとんど五十歳で、その間に劇画芸術家として地位を確立した水木は、彼が日本社会にたいする、前からずっと批判的である関係をより広範な世間に提示する時が来たのを見た。

初めは一九六九年の漫画「敗走記」だった。水木はそこで、第二次大戦での兵士として体験した時期からの主な逸話を、ニューブリテン島（南西太平洋、ビスマーク諸島の島）の密林で生き延びる戦いを描く。この短い作品は、彼の主要作品「総員玉碎せよ！」（「名誉の死のために全人員が支度すること」1973）の序章であった。これは水木の日本軍国主義との決着である。子供時代の自伝「のんのんばあとオレ」（1977）、自伝「ねぼけ人生」（1982^{注1}）、「ラバウル戦記」（1982）、そして最後に大部な作品「コミック昭和史」（1986）が続いた。これでは著者の人生が日本のつい最

近の出来事に織り込まれている。

注1 二〇〇四年に水木の自伝が出る。「水木サンの幸福論」（そこでは、一つには、「若者への助言の意味で——重点は個人主義的生き方に置かれる。「お前は馬鹿者か？ よしそれなら！ お前が面白いと思うことをせよ！」がその本の広告帯にある）。他方では、超感覚ブームのファンがサービスを受けている。水木はあれこれするうちに、彼らの象徴的人物として見られている。そのことに關しては、この分野での指導的雑誌『怪』を見よ (<http://www.kawai.org/>)。

訳注：「のんのんさん」とは、境港辺りでは神社に仕える人。

彼の自伝作品では、人生の二つの時期が再三強調される。一つは、鳥取県の海岸都市である境港での子供時代であり、もう一つは、一九四四から四五年、つまり、日本にはもう勝ち目がない時期に南方戦線で体験した軍隊時代である。特に後者は、当時二十歳である兵士の物の見方に決定的に影響した。

自伝「ねぼけ人生」で水木は、一九四一年から軍部独裁下での戦争の熱い段階を「灰色の人生」（1969：74）と呼ぶ。彼の人生におけるこの期間は、故郷での幸せだった子供、少年の時とはまったく対立するものであった。そこでは、規範から逸れる態度が厳しい制裁で罰せられることはなかった。自立し始めるとともに彼はその制裁の下で長年苦しむことになった。

水木は自分自身を、大人の世界に順応するのがとても下

手な一風変った子供として描く。親や教師は、彼が規則を守る点で怠惰でありいい加減であることを、まず、彼が愚鈍であるせいにする。それで彼は仲間より一年遅れで入学させられる。彼のそういう態度は後になっても変わらず、生涯ずっと彼の教師や上司は、反抗的な人間か精神的に遅れている人を相手にしているのかと迷う。

権威とのさまざまな問題があったにもかかわらず、水木は彼の小世界と調和して生きている。そのことはまた、彼に理解を示し、真剣に受け止め、彼の才能を促すそういう関連人物（心理学・社会学用語。その人との個人的交わりに基づいて、例えば子供が自分の考えや態度を確かめ定める、そういう人物）を周囲に持っていることによる。彼のきわめて聡明だが〔早稲田大学卒〕、生活能力のない父は、そういう人々の一人である。彼の尋常でない絵の才能に気づく教師〔高等小学校一年時の由木先生〕は、もう一人の人である。

けれども、その子供に大きな影響を及ぼすのは、とりわけ、ある「拝み手」の男の妻である。水木はその人を「幽霊のことを教える女先生」(1939: 20)と呼ぶ。そのことで彼が言うのは、彼女が夫の死後、上手にとりより下手くそに臨時雇いの掃除婦として困難を乗り越えたこと、地域の信仰の特色を帯びた物語や日常生活の知恵によって、少年が日本の霊の世界、悪霊の世界に入ってしまったということである。

水木が人と違っていることが、彼にとって生きる上で初めて問題になるのは、彼が関連人物なしに独り立ちし、社会で自分の力を示さねばならないときである。一九三七年、十五歳で学業を終えた時と一九四三年の応召の間は、仕事では失敗ばかりしていた。その時期は、同時に、軍国主義的大勢順応主義の色彩が強い社会から、若い水木が疎外されていたことを際立たせる。そういう社会では個人は顧慮されることはない。

水木の極度の自己中心性は、それほど権威主義的でない社会でも目立ったであろうと言わざるをえない。自伝的作品での「私」が、自分を取り巻く世界にも気づくのは、世界が彼の独自の関心と直接に関係しているときだけである。それに対して、彼は他の一切にどうでもいい無関係の態度で向かう。社会生活上どうしてもしなければならぬことをする際に「私」を撤回すること、社会の基準に服することとは、視野に入らない。だから、水木の自伝作品で「私」の辛い適応過程を探してもむだである。権威によってなされた処置に対する驚くべき無理解しか見つからない。しかもその処置の方は何の効果もなく跳ね返えされているようである。

意識的な抗議姿勢が欠けていることは、「私」の外界に対する関係を説明するのを困難にする。発達心理学では、七歳までの小児の周りの見方を特色づける自己中心主義という現象がある。子供は自分を取り巻く世界の出来事を、ま

るで世界は自分のためにつくられたかのように、自分との関係でしか見ない。自分の観点だけが本質的であるので、自分を他者の立場で考える能力が欠けている。中年の水木の発言や書き物でもしばしば受ける印象は、彼にはこの他者の視点が欠けているということである。

自伝「ねぼけ人生」への注釈で、文化批評家呉智英はほとんど六十歳になった水木との出会いについて伝えている。水木は成田空港建設反対運動を目の当たりにして彼が全く理解する力がないことを表現した。政治関係の懸念からではなく、彼にとって「空港ができれば」成田がより近く、そしてそれゆえ、より実用的だろうからというのである。

そこに生きている住民にとって建設が意味する問題は、彼の頭には浮ばなかった。相手である呉の説明の後でも、彼は空港がもつ実際の側面しか見なかった(水木1999: 254)。この点では、彼の性格のある種社会的センスのなさという側面を確認しなければならぬ。大勢順応主義の、個々人の自由を制限する社会システムへの彼の批判もそういう性格を背景にして見られねばならない。

一匹狼である水木は、権威主義的な社会構造の下で頑張りとおさざるをえない。それでいて彼はシステムとの対決で決して本当に悩んでいるようには見えない。彼は屈辱をどうでもいいという態度で甘受する。ようやく後の自伝的作品で水木は憎しみについて書く。軍国主義にたいして、その最高代表者、昭和天皇にたいして彼が感じた憎しみに

ついて、一九八九年の天皇の死でようやく収まった憎しみについて^{注2}。この憎しみを、戦時中の日本社会によってますます疎外される「私」が、彼水木によって描かれるときの冷静さと調和させるのは難しい。

注2 『コミック昭和史』第八巻(水木2000: 249以下)で最もはつきりしている。

その良い例は、十九歳の水木にたいし「夜間中学で」全校の前で屈辱をもたらす、学帽を忘れた時の逸話である。校長が彼を壇上に立たせ、短い演説「この非常時に、実にだらけた生徒がいる」で彼を国民の害虫の類と呼んだ。著者はこの体験をこういう言葉で注釈する。「帽子のためだけで私は例のないほどだらしない生徒であると宣言された。もともと私は夜間学校へ入った後は、しばらく世間は静かになると考えていた。けれども日本国民は、インドシナへの軍の侵攻後は熱病のような興奮状態にあった。」(水木1999: 173)

水木がこういう風にして人前に引き出されるのは一回だけではないけれども、このような体験への彼の寡黙な注釈は、当時の「私」の苦しみを証言していない。彼の魂はこういう取扱で何の傷も負っていないように見えるが、逆である。まさしく逸話風であるのは、面子を失うことが今日でもなお、後々までの心理的障害のきっかけでありうる文化内での、そのような体験の記述であるからである。

逸話風であることは、彼の自伝的作品での文体原理である。そして「私」はその姿勢において大いにピカレスク小説の主人公を思い出させる。

弱者の状況、英雄的でない態度、素朴さ、社会による全面的召集からの避難所を示している無垢。これらすべてがピカレスク小説で一般的なモチーフである。水木を厄介な状況から救うのは、とりわけ、愚者の状態である。

しかしまた愚者にも限界が置かれていることは、軍国主義下での「私」が特に前線で辛く体験しなければならない。戦争の、自殺するに等しいような最後の局面では、人をさげすみ、何かあると暴力に至る階級組織内で生き延びるために戦闘しなければならなかった普通の兵士には何ら容赦もなかった。

日本軍の南方前線での主要基地のあるラバウルという町のあるニューブリテン島で、水木兵士の本来の地獄が始まる。上等兵によるしごきで、下級兵士が死ぬほど苦しめられたのは稀ではなかった。このしごきがたいいてい新兵によって耐えられたのは、彼ら自身がいつか上の地位について、自分でもなぐることができるかもしれないという思いからだけであった。

しかしパプア・ニューギニアの日本軍部隊はあの時点で本土から切り離されていたので、増援補給はもう来ず、階級組織で最下層の兵士が知っていたのは、戦争が終わるまで自分らが死ぬまで、彼らに毎日の虐待から逃れる希

望はないことだった。

水木兵士がその性格でいて生き延びるのに耐えねばならない暴力にもかかわらず、彼は自分の自主性を、そして南洋の新しい、見なれぬ世界にたいする彼の特別な視点を保持する。毎日の繰り返しされる任務と殴打の後、戦闘行動はない。それで、「私」には、密林の神秘にあふれた世界に驚嘆する余裕が充分残っている。新しいもの見なれぬものについて驚嘆することは、他者によって自分が規定されていることからの逃亡であり自己防衛である。これを「私」はもう子供の時から、特に、思春期の頃から実行してきた。例えば、水木の自伝「ねぼけ人生」からの次の箇所を見よ。

私は仕事の間も自分の個人的関心を優先していた。ある時、仕事の途中で、太鼓作りが動物の皮を木の筒に張っていたのを見たとき、私は自転車を止め、仕事している彼を眺めていた。彼はどんな道具を、どのように使うのか、そういったことを私は見たことがなかった。私はそれを素晴らしい面白と思った。会社に戻るともう得意先から怒りの電話が来ていた。私が亜鉛印刷原版〔印刷に使う長さ一メートルほどのジंक版〕を「お届けにあがりました」の一声もなくその家の前で降ろしたときであれ、本来、二時間で届くの夕方になってようやく届けたときであれ。(1989: 63)

単調に同じことが繰り返えされ、長たらしく行なわれる社会で他者によって規定されていることに対する「私」の

自己防衛は、前線では生き残りの自己保持の方法となる。そのことは水木の自伝での中心的逸話の一つではっきりする。それはいつも新たに換えられて他の作品でも現れる。それは彼が所属する部隊全滅の記述である。彼は部隊で生き残った三人の兵士の一人である。彼の一九八二年と二〇〇四年の、散文で描かれた二つの自伝では、水木を死から守るのは、朝焼け前に行なった、その夜最後の見張り番という偶然である。それに対し、漫画とイラスト形式で表現されたものでは、朝に自然への驚嘆が目覚めたことが、仲間を起こすことになっていった陣営に戻るのが数分遅れることになる。この遅れが彼の命を救う。起こすことになっていったその瞬間に陣営は爆撃されるのである。

だから、より高い意味では、彼の性格にふさわしい、他者を瞑想してじっと眺めることは、生き延びることの原因である。戦争で仲間の生死を決することも、処罰に値する兵役義務怠慢という道徳上の問題は、無論、残り続ける。それはまたひょっとして、水木兵士の怠慢が散文作品でのこの箇所で強調されない理由かもしれない。

軍という機構から疎外された「私」にとって感覚の「遠近法でいう」消尽点として役立つ密林という他者性は、敵からの実際の消える場所にもなる。島に到着する前に、この素朴な「私」は、まだ知らない自然を上官に説明されるようなエデンの園に似た、パイアの楽園と想像した。この楽園の想像は、逃亡する水木が密林奥深くに入り込み、

そこを生々しく別の側面から知るまで消えない。彼の生き残るための戦いでは、深く見通しのきかない密林は、すでに彼に子ども時代の森が祈祷師の妻によって描かれたような、気味な場所、死の場所になる。

密林という、彼を圧迫し悩ます自然は、蚊の群であればほとんど越えがたい妨げであれ、彼には地獄として感じられる。子供時代のアニミズムがここで効果を発する。この体験後の記述では、この傾向が強められる。「周りにある巨大な木々」という障害は、密林という巨大な網となり、そこでは通過するということがありえず、最終的には、ヌリカベという名の森の霊となる。

発達心理学者のピアジェ (1896—1980) によれば、事物に魂があると信じるアニミズムは、子供の自己中心的な非論理の本質的な要素である。想像で描かれた事物は、リアルな出来事として保持される。これは水木が意識している事態である。「五、六歳の時私は船を〈見た〉。船が煙突から煙を吐きながら山の上へ登っていった。それはおそらく夢だったろうが、私の中には、本当の出来事の思い出として残っている」(1989: 21)。この子供にとって、大人たちに証明してもらえないこの思い出は、大きな問題だった。最終的に、子供らしい論理が説明を用意した。それによれば、その船は人間の視線にたいして本当の姿を隠していて、彼らがいないときだけ山を登る。想像と信仰がここで結びつきを引き受ける。これは水木の心象世界の美学にとって

特徴的となる。

水木兵士にニューブリテン島住民のなかで霊の縁者、トライ族を認識させるのは、彼の故郷のアニズム信仰である。彼が左腕を失うことになった爆撃後の最初の出会いがすでに、まるで「部族のある」集団の女先立との最初の視線を合わせただけでもう、互いを「見分ける」という結果になるかのように描かれる。

現実的に見れば、食糧を求め、戦で傷ついた水木にとってこの出会いは生き残りの問題であった。彼の仲間の間では、たいていの者は故郷に帰還するという希望を捨てていたので、死の宿命、死ぬ覚悟が広まっていた。他方、一匹狼の水木のほうは、「天皇のための名誉の死」という考えにまだ感染していない、生への意思が潜んでいた。この意思が彼を前もってこの出会いに定めていた。

そのような出会いは決して当然のことではない。トライ族は日本人侵入者にたいして基本的に敵対心があったからである。しかし、この戦争負傷の、やつれきった、飢えた影のような兵士に対して彼らはそうではなかった。彼らの動機に関しては、推測しかできない。水木の作品テキストは何も提供しないからである。

アードルフ・ムシユクは、『よそ者であるという体験』という書物で、客をもてなすことを賢さの行為と呼ぶ。よそ者は、情報、知識、あるいは将来の善行の潜在的根源として、「好意を抱いた疑い」に基づいて処遇される。「同時に、

客をもてなすことで誰かにたいする注意を示す。この誰かは、人がそうなるかもしれない誰かであり、しかし幸い、人はまだそうならない誰かなのである」(ムシユク1987: 29以下)。

水木の場合も単なる同情以上であったに違いない。食事への一回だけの招待に留まっていなかったからである。どうやら、土着の人々は部隊の唯一の人として彼らとの接触を求めるこの兵士に、自分らと関わりあおうとする気持ちと開いた心を見ているらしい。彼らの文化に彼が関心を持った事で、彼らが彼に新しい名前をつけ、彼に耕し住むための地所を自由に使わせるように、彼を彼らの一人として扱うようになる。水木は喜んで新しい帰属を受け容れる。そういうふうにならねばと彼が彼自身であることができるだけに、いよいよもって受け容れる。それは彼を狂人のように扱う日本社会とは違っている。彼にとってトライ文化の他者性は異質なものではなく、故郷での子供時代の親しいものである。

魂があると信じられた自然のリズムにしたがったトライ族の日常、自由な時間のほとんど無限の所有、満足の前提としての眠りや食のような基本的欲求を満たすことの優先。これらすべては、その体力の限界にある兵士に都合よくやって来ているだけではなく、彼に幸福な子供、少年の時を思い出させる。『コミック昭和史』第六巻で彼はトライ族としての遭遇を、まるで彼が故郷に戻ったかのような感情として

描く。

この関連では、最初でも最後でもないが、楽園と地獄の対比が浮ぶ。この考えもまた子供時代の体験に由来する。より詳しく言うと、叔母と寺を訪れたことである。叔母は彼に二枚の大きな絵を見せる。それぞれ極楽と地獄が描かれている。これは子供に圧倒的な印象を与えたに違いない。丘の上にあるトライ族の小さな集落での彼の滞在をも、水木兵士は極楽という。谷にある彼の部隊の陣営のほうは地獄である。

同じような感情が、漫画作家として成功した後のほぼ五十歳の水木を、成長至上主義で人に親切でない日本を目の当たりにして襲う。それに対抗して彼は、頭に浮ぶイメージを置く。市場経済の原理を持たず、調和がとれ自己自身だけで満足して落ち着いた共同体の様々なイメージである。*〔多忙から〕* もう自分の時間を自分で思うように使えない彼は、それらに憧れる。「ねぼけ人生」で彼はその感情を「楽園への望郷」(水木1999:232)と呼ぶ。もちろんあの時期の水木に当てはまるのは、ヘルマン・シュトゥルムがその論文「異質なもの。埋葬、旅、ミサ、死での美的経験」で書いていることである。「それぞれの今と区別されたもの、日常から分かれたものへの憧れは、生きていくうえでの苦難と生きていくうえでの欲求を超えて贅沢に暮らすことが可能になるところでようやく、希望と想像の原動力である。」(シュトゥルム1985:17)

鶴見俊輔は、水木の時代批評は〈劣等〉の視点から行なわれていると書く。それは鶴見が左派の批評と区別したがっている批評である(1980:91)。鶴見に同意しなければならぬだろう。

けれども自伝執筆の時期には、〈劣等〉の視点はすでに位置が変わっていた。「私」がその作品で負け犬の姿勢を決して否定しなくても、やはりはっきりしているのは、ここでは生き残り勝ち誇っている者が語っていることである。それは、苛酷な苦難一切にもかかわらず、社会で認められることに成功した者である。この成功によってようやく、そして成功の後ようやく水木は、社会の不都合に対する視線を持つが、ただし彼はそれを取り除こうとはせず(左派との根本的な違いである)、それらから〈全く別のもの〉の世界に逃れたがるのである。

けれども二六年後に水木は南洋でも彼の楽園をもう見出すことができない。資本主義の原理が地上のこの片隅にも達し、人間をその魔力で捉えたからである。今や水木は、ようやくまた、システム上の類似性によって、時間がより少ないこと*〔忙しい〕*になっているこれらの人々の貧しさを認識する。

彼は「失われた楽園」について書くが、この楽園はすでに一九四五年に幻想であり、自分の子供時代の投影であった。彼はこの消失をトライ社会の開化進行で説明する。けれども真実は、一九四五年とは違って、彼が日本社会での

地位を確立することで、彼の生存にかかわる苦境と社会での疎外がもう眼前にないということである。そのことでまたユートピアを求める熱望の基盤は取り去られている。そして明らかにするのは、文明の倦怠と批評がその基盤の代わりにならないということである。トライ族との出会いの叙述は、逆向きのユートピアの性格に相応している。しかしむしろ現実逃避の姿勢に動機づけされている。ひょっとしてまた、戦争が終わってすぐに、トライ族が彼らの下に留まりなさいという申し出をしたのを断っていることも、逃亡と呼べるかもしれない。

ユリア・クリステヴァは、よそから来た者と土着の人々の出会いを、一時的なものから幸福を受け取る相互の承認と呼ぶ(1990:20)。この一時的なものは水木には、最終的なものより好ましい。最終的なものは〈夢〉に対抗できないのである。というのは、彼の主張された真剣さにもかかわらず、若い水木は軍医大尉によって、親の元へさしあたり戻ることが正しい決定であると、相当早くに説得されてしまうからである。

具体的な場所にしっかり結びついているということではなく、「自国の中のある者」である水木は、むしろ、「ないものに没頭する夢想家」のままである。これはクリステヴァの表現である。

到達しがたくまたある種の、どこか別の場所に惹きつけられて、よそ者は逃亡する気である「…」あの目に見

えない、約束の領域を求めて。そういうものは存在しないが、しかし彼の夢では現れるあの国、そしてそれはおそらく彼岸と呼ばねばならない(クリステヴァ 1990:15)

すでに米沢嘉博は水木の作品でのこの関連を指示している。作品では、死が他者によって規定されたと感じられた日常の救済として機能している。ないものに夢中になることは、逆に、あるものに直面して満たされないでいる感情である。それは、デリダの代補理論によれば、それなしにはどんな生存も考えられないような、もっと多くを求める感情である。

この感情は、トライ族の社会がそこに残る水木にとって疑いなくそうであったような最終的な現実との対決では満たされえない。だから、元々、楽園の喪失について語ることはできない。彼はそれを一度も所有したことがなかったからである。彼が楽園への郷愁を感じる条件は、そう、まさに実現不可能なのである。そして我々は、一体そもそもまだユートピアについて語ることができるかどうか、自問しなければならぬ。その前提は、どんなに遠くにあっても、実現の可能性があるということだからである。

「ねぼけ人生」で水木は最後に南洋の楽園から彼の根源、子供時代の世界に転ずる。そこでは、霊や悪霊は別世界の感じられた存在である。そこでは「私」は他者に規定された日常で不可能なことをすることができる。すなわち、空

間と時間を自由に使える。

ところでその際にまだなお調査されるべき、著者の宗教的動機が何か役を果たしたかもしれない。彼はほとんど六十歳で最初の自伝作品での執筆時期にすでに自己の有限について思いをめぐらしたのであろう。

水木の楽園への郷愁は、個人の自由が万人平等のシステムの形で実現されるよりよい社会へのためのユートピアでなかったし、またない。実際に彼の作品では平等のテーマは一度も現れない。水木は社会というものに理解がなく、彼自身の個人としての自由と別であるものは視野に入らない。幻想の世界へ、つまり、幽霊たちの世界に戻ることは、「私」が自分に何の顧慮も限界も課す必要がなく、幸福であるという考えが決して終わりを迎えることがないという意味では、首尾一貫している。

文献

一次文献

水木しげる (2004) : 水木サンの幸福論。日本経済新聞社。

水木しげる (2000) : コミック昭和史。全八巻。講談社文庫。

水木しげる (1999) : ねばけ人生。筑摩文庫。

二次文献

クリステヴァ、ユリア (1990) : 我ら自身が他者だ。フランクフルト。ズールカンフ。(邦訳『外国人—我らの内なる者』

法政大学出版局)

ムシュク、アードルフ (1987) : よそ者である体験。ミュンヘン。マックス・フエーバー。

シュトゥルム、ヘルマン (編) (1985) : 異質なもの。埋葬、旅、ミサ、死の美的体験。アーヘン : Rader (=『美学年鑑』第一巻)

鶴見俊輔 (1980) : 水木サンのユートピア。根源的現代文明批評。水木しげるの世界。『別冊新評』54, 90—97所収。

米沢嘉博 (1980) : 異郷への招待状。万人のユートピア。同右。152—157所収。

☆本稿は、「楽園への郷愁—水木しげる自伝作品での他者体験 Heimweh nach dem Paradies. Die Erfahrung des Anderen im autobiographischen Werk von Mizuki Shigeru」として、ボン大学オリエント・アジア学研究所 (IOA) シリーズのシュテファン・コナーマン監修『ボン大学アジア研究』第八巻一号に掲載され、ギュンター・ディテルラート Günther Distelrath 編「第十三回ドイツ日本学者研究発表 文化学・言語学」として二〇〇九年に EB-Verlag Dr. Brandt Berlin から出た。

ドイツ語で記述されドイツで出版されたため、日本人の目に触れる機会が少ないことを考えて、今回二〇一一年四月四日に大澤隆幸の協力を得て翻訳した。〔 〕 部分は理解しやすいように大澤が入れた。